

環境資料第36044号

令和 5 年 度

水生生物調査結果報告書
(東京都内湾)



令和 7 年 3 月

東京都環境局

表紙の絵

左：メリケンキアシシギ（お台場海浜公園、令和5年5月）

旅鳥として主に春季、本州の太平洋側や伊豆諸島、小笠原諸島に飛来するが、個体数は少ない。岩礁や海岸に生息する。上面は暗灰褐色で、下面は胸から下尾筒まで密な横斑に覆われる。脚は黄色。岩礁や消波ブロックを歩きながら甲殻類やフナムシ等を捕食する。「ピリリリ」と鳴く。キアシシギに酷似するが、体はより暗色で鳴き声が異なる。令和5年度は5月にお台場海浜公園で1羽が観察され、本調査における初記録となった。

右：カワハギ（お台場海浜公園、令和5年8月）

全長 25 cmほどになる。北海道以南の日本各地に生息し、水深 100m 以浅の砂地で小型甲殻類やゴカイ類、貝類等を食べる。東京湾では、湾奥での出現は少ない。過去に成魚調査では出現しているが、稚魚調査での出現は今回が初となる。

鳥類調査	：カワウ、カモ類等	62 種
成魚調査※	：ハタタテヌメリ等	13 種
稚魚調査	：マハゼ、ビリンゴ等	38 種
付着動物調査	：イワフジツボ等	60 種
底生生物調査	：アサリ等	76 種

川

ヨシによる栄養塩の取り込み

ひがた 干潟

大気中の酸素が溶け込む

砂浜のろ過

海水

海藻(草)類 (ワカメ、コンブ、ノリ、アマモなど) による栄養塩の取り込み

岩場

有機物の沈殿・吸着

植物プランクトン

動物プランクトン

溶出

死がいの沈殿

底生動物や微生物による分解

アサリなどの貝は、海水をろ過する。

カニやゴカイなどの干潟に生息する生物は、泥の中の有機物を食べる。

干潟(ひがた)の生態系

- 1 -

調査地点（赤字の地点については巻頭3～5ページで紹介しています。）



内湾部 4地点
(St.6、St.22、St.25、St.35)

浅海部 2地点
(St.10、三枚洲)

河口部 1地点
(St.31)

干潟部 5地点
(葛西人工渚、お台場海浜公園、城南大橋、森ヶ崎の鼻、多摩川河口干潟)

護岸部 2地点
(中央防波堤外側(その2)東側、13号地船着場)

※調査地点の詳細については、本文2、3ページ参照

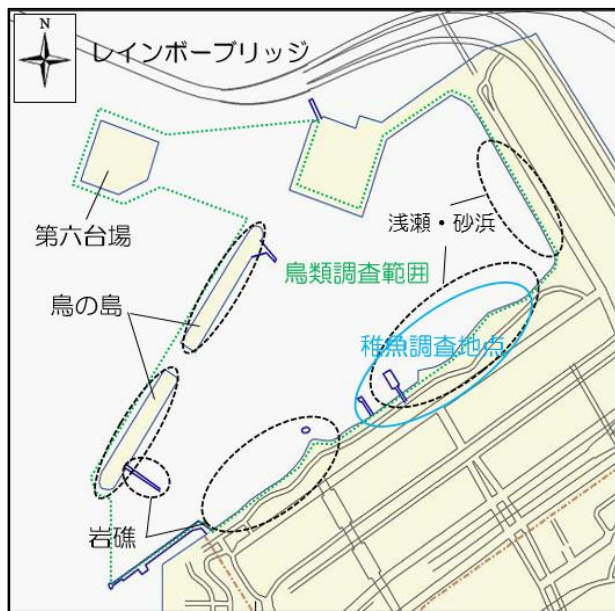
お台場海浜公園 ～水生生物にも人気のスポット～

実施調査：鳥類、稚魚



お台場はペリー来航時に砲台を置いた場所で、今でも二つの台場が残っています。一時期は貯木場として使用されていましたが、その後、海浜公園として整備されました。現在、近くには複合商業施設やテレビ局本社があり、夜には多くの屋形船が停泊し、東京の観光スポットとして賑わっています。人工砂浜も整備され、誰でも海のすぐ近くまで近づくことができます。

調査位置図



鳥類調査



カワウのヒナと成鳥 2月



トビ 2月



チュウシャクシギ 5月

稚魚調査

クロダイ 6月

夏秋の幼魚期は内湾や沿岸域に定着し、秋冬になると内湾周辺の深場で越冬をする。



マハゼ 10月



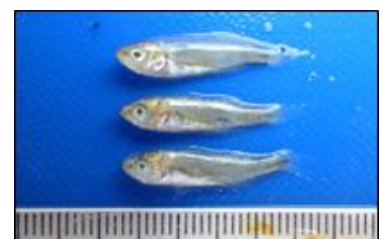
5月は3～4cmほどだったが、10月になると10cmほどに成長していた。

アユ 2月



アユの稚魚は、12月から5月にかけて確認される。

スズキ 2月



スズキの仔魚は、内湾の干潟域や人工海浜でハゼ科の稚魚や甲殻類等を食べ、急速に成長する。

葛西人工渚（東なぎさ） ～水生生物の楽園～

実施調査：鳥類、稚魚



葛西人工渚は、葛西海浜公園に造成された人工の干潟です。2つの干潟（西なぎさ、東なぎさ）から成っています。西なぎさには橋が掛けられ、人の立入りが可能となっており、近年は海水浴体験イベントが実施され話題となっています。一方、東なぎさは環境保全ゾーンとなり、一般の立入りが禁止され、鳥をはじめとした水生生物の楽園となっています。

調査位置図



鳥類調査

①エリア

ホウロクシギ、チュウシャクシギなどのシギ・チドリ類、サギ類が採餌、休息



オオソリハシシギ 5月

②エリア

カワウ、カモメ類が休息



9月

③エリア(調査範囲外)

スズガモ、カイツブリ類が海上で休息



2月

④エリア

カワウ、サギ類、クロツラヘラサギが休息



クロツラヘラサギ 1月

稚魚調査

エドハゼ 8月



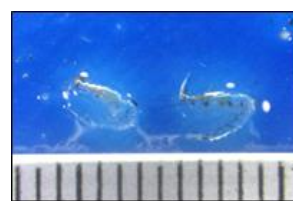
ヒモハゼ 11月



チクゼンハゼ 11月



ニホンイサザアミ 10月



エドハゼ、ヒモハゼやチクゼンハゼ等のハゼ科稚魚が多く採取された。

春から初夏や秋にかけて大量発生し、魚類等の餌となる。

森ヶ崎の鼻 ～埋め立て地に囲まれた干潟～

実施調査：鳥類、底生生物

森ヶ崎の鼻とは、羽田空港の北西の運河域に位置する約 15ha の干潟のことです。干潮時には、くの字型の干潟が干出します。京浜島緑道公園等から眺めることが出来ますが、一般の立入りはできません。すぐ脇には東京モノレールが走っています。また、隣接する森ヶ崎水再生センターの屋上には、NPO 法人等により守られたコアジサシの人工営巣地があります。

調査位置図



鳥類調査

①エリア

コアジサシが空中から水面に飛び込んで採餌



コアジサシ 5月

②エリア サギ類、シギ・チドリ類、カモメ類が採餌、休息



シロチドリ 8月



アオサギ 9月

③エリアではカモ類等が採餌、休息



オカヨシガモ 2月



コガモ 1月

森ヶ崎水再生センターの「コアジサシ」



環境省レッドリスト 2020：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

東京都レッドデータブック 2023 年版（区部）：絶滅危惧ⅠB 類（EN）

オーストラリア、ニュージーランドで越冬し、4～8 月に日本周辺で繁殖。近年、自然の営巣地が減っている。森ヶ崎の鼻に隣接する森ヶ崎水再生センター屋上に人工営巣地がある（NPO、行政）。

底生生物調査

ミスヒキゴカイ



ホンビノスガイ

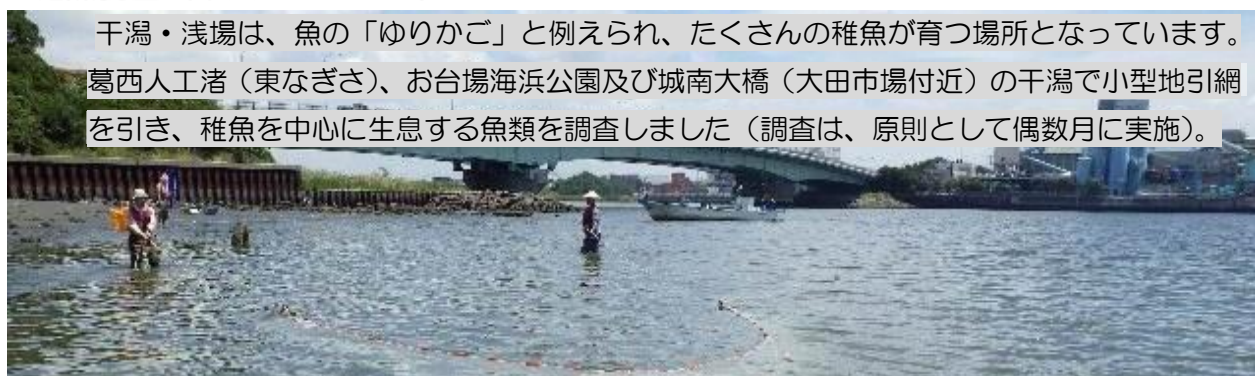


ムロミスナウミナナフシ



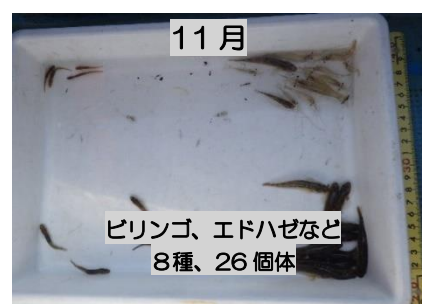
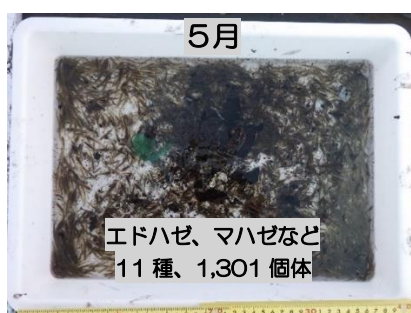
春夏を通じてゴカイ等の多毛類が最も多く出現し、二枚貝ではアサリやホンビノスガイが出現した。干潟であるため、夏季の貧酸素の影響は少ない。

稚魚調査（本文 14 ページ）



葛西人工渚（東なぎさ）

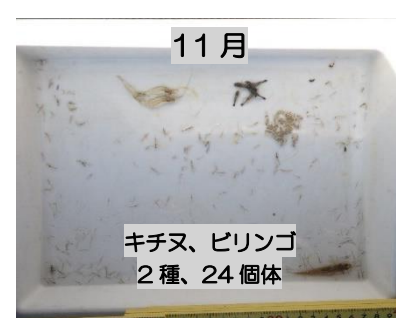
種類数・個体数は魚類のみの数値



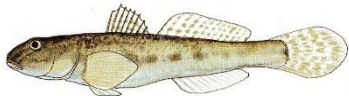
お台場海浜公園

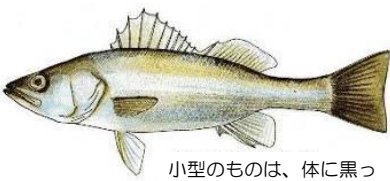


城南大橋



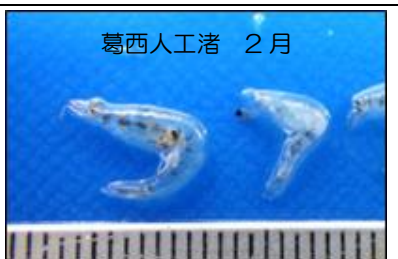
稚魚調査（小型地引網）で採集された代表種

種 名	生 態 情 報	図・写真
マハゼ	東京では最も大きくなるハゼ。春先、稚魚が河口付近の干潟に現れ、成長するにつれて色々な場所へ散らばっていく。河口や内湾ではU字型の深い穴を掘って産卵する。	 東京都内湾の代表的な底生魚である。稚魚調査で確認されるマハゼは、10 cm ほどの個体が主であるが、育つと全長は 30 cm 程度となる。 秋から冬にかけて最も人気な釣りの対象種

種 名	生 態 情 報	図・写真
ビリンゴ	泥底から砂泥底に住む。河口部に泥底域が発達しているところに多い。 岸边近くの泥底に穴を掘るか、アナジャコやゴカイなど、他の動物が掘った穴を利用して巣を造り、巣穴の壁面に雌が産卵した後ふ化まで卵を守る。ふ化仔魚は一旦海に下り、しばらくして川へ遡上する。	寿命は2～3年であるが、1年で成熟して産卵後に死亡する個体も多い。全長は6cmほど  お台場海浜公園 6月
エドハゼ	自然環境が保たれている河川の河口域に生息する。砂泥底を好み、スナモグリ類やアナジャコ類が掘った巣穴を使って暮らしている。主に小型甲殻類を食べる。特に、葛西人工渚で多く出現する。	 葛西人工渚 5月
ボラ	出世魚で、小さいものから順に、ハク、オボコ、イナ、ボラ、トドと呼ばれる。卵巣を加工したものはカラスミと呼ばれ、珍重されている。 都内河川の下流部から内湾に広く分布している。泥底の有機物などを餌とする。	 お台場海浜公園 5月 海面で飛び跳ねる。お台場海浜公園で跳ねている魚を見かけた場合、その多くはボラである。成魚の全長は60cm程度
スズキ	東京湾を代表する魚。河口の干潟などでは、春先、数cmの稚魚が多く現れる。東京湾を広く回遊し、都心近くの運河でも見られる。河口部から内湾に広く分布しており、ゴカイ類、甲殻類、小魚などをエサとする。	 小型のものは、体に黒っぽい斑点がある 成長すると全長は50～90cm程度になる。

魚類調査において確認された魚類以外の生物の代表種

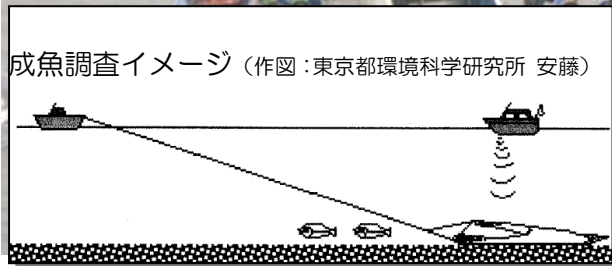
干潟の地引網調査では、魚類の他に、甲殻類、アミ類や二枚貝などが採集されます。それらは稚魚などのエサとして重要な役割を持っています。

種 名	生 態 情 報	写真
シラタエビ	触角が青いことが特徴のエビ。額角の基部が盛り上がることで、スジエビ類と区別ができる。汽水域を主な生息場とし、干潟にもよく出現する。成熟した個体では、体側に青色斑が現れることが多い。	 お台場海浜公園 10月
ニホンイサザアミ	汽水域に生息するアミの仲間である(エビの仲間ではない。)。魚類等の餌となり、食物連鎖において植物プランクトン等生産者のエネルギーを上位の消費者に渡す重要な役割を果たしている。佃煮や飼料としても利用される。	 葛西人工渚 2月

成魚調査（本文 58 ページ）

底引網を使って、海底に生息する魚類を調査しました。夏場、海底の酸素濃度が低くなる期間には、魚類の減少が顕著に表れます（巻頭 1 ページ参照）。

東京都内湾で最も沖合のSt.35、中心にあるSt.25、千葉県側のSt.22、浦安沖の浅海部のSt.10の4地点で5月、9月、12月及び2月に調査を行いました。ここでは、St.25についてご紹介します。

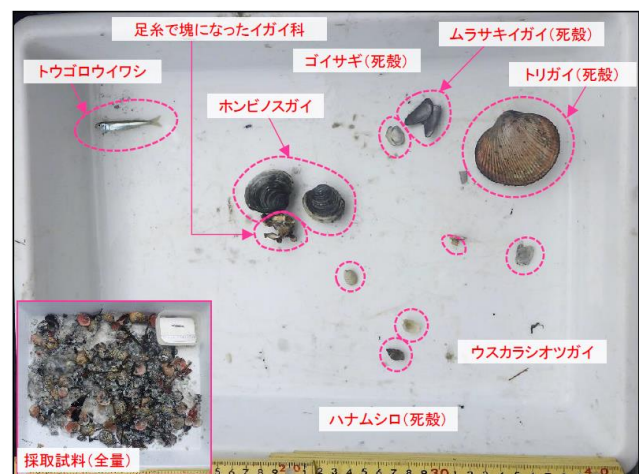


St.25（魚類以外も含む）

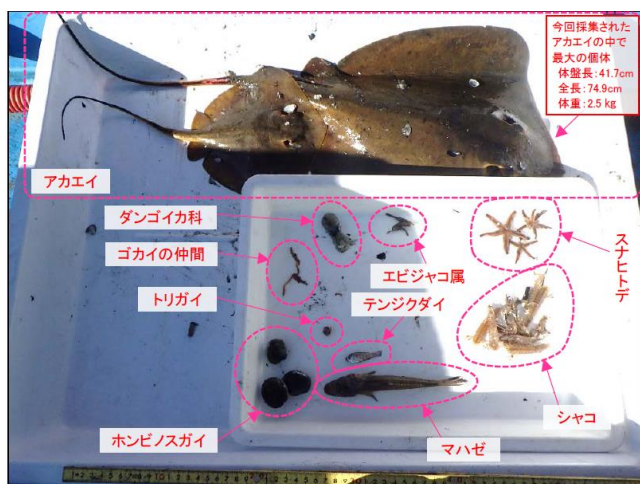
5月 34 種、853 個体 下層 DO 3.6mg/L



9月 4 種、9 個体 下層 DO 1.5mg/L



12月 14 種、139 個体 下層 DO 5.5mg/L

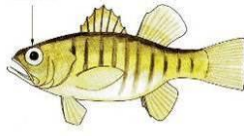


2月 34 種、725 個体 下層 DO 8.6mg/L



下層 DO（溶存酸素濃度）が低くなる夏場では、生物がほとんど確認できなくなります。酸素濃度が回復に向かう秋口から徐々に生物が戻り始めます。しかし、次の夏にはまた生物が生息できなくなる環境が発生するということが、現在の東京湾の大きな課題となっています。

成魚調査(ビームトロール)で採集された代表種（魚類以外も含む。）

種 名	生 態 情 報	図
テンジクダイ	内湾から水深100mくらいまでの砂泥底にすむ。 夜行性で、7～8月頃産卵する。 雄が口の中に卵の塊を含んで守る。 海底の小動物をエサとする。	 目が大きい  全長は9 cm程度
ハタタテヌメリ	内湾の砂泥底にすむ。雄と雌とで模様が異なる。雄は尾びれが長くて糸状に伸びる。粘液を出すのでヌルヌルする。ゴカイ類や二枚貝を餌とする。食用になる。	 St.35 12月
マコガレイ	水深100m以浅にすむ。イシガレイと異なり、成魚になると浅瀬では見られない。産卵期は冬で、東京湾では40cm以上のものも出現する。	 St.35 5月
マゴチ	褐色の帯が入る平べったい体の特徴。内湾や河口域の水深30m以浅の砂泥底に生息し、底生生物や小型の魚類を食べる。稚魚は干潟域等の浅所で生活し、成長とともに深所へと移動する。	 St.22 5月
シャコ	東京湾では15～30mの深さにすむ。肉食性で甲殻類、多毛類等を捕らえて食べる。江戸前の寿司ネタとして重宝されるが、近年、漁獲量が少ない。	 St.22 5月
トリガイ	ほぼ球形で、殻は薄く脆い。長い足が鳥の嘴に見えることが名前の由来とされる。危険が迫るとこの足を激しく振り回して逃亡する。内湾の砂泥底に生息し、東京湾奥部では夏季の貧酸素水塊の発生により、ほとんどが死亡する。	 St.10 5月
ホンビノスガイ (外来種)	殻長10cmを越える丸みを帯びた三角形の大型種。貧酸素状態等の環境悪化に耐性がある。外来種であるが、東京湾ではおなじみの貝となっている。殻の色は本来白っぽいが、底泥中の硫化物の影響で黒っぽくなっている。	 St.10 5月

鳥類調査（本文 79 ページ）

葛西人工渚、お台場海浜公園及び森ヶ崎の鼻で年6回（5月、6月、8月、9月、1月及び2月）に調査を行いました。



※各地点の調査範囲内での鳥類の様子は3～5ページ参照

調査の方法

望遠鏡や双眼鏡を用いて、船上や高台から鳥の種類ごとにカウントし、その行動（休息、採餌等）についても確認を行いました。

鳥類調査で確認された代表種及び重要種の一例

種 名	生 態 情 報	写 真
カワウ	留鳥として内陸の淡水や河川、湖沼等で最も一般的に見られる。たくみに潜水して魚類や甲殻類を捕食する。関東での繁殖はほぼ一年中であり、水辺近くの林で集団繁殖する。東京湾周辺では、第六台場や行徳鳥獣保護区等をコロニー（集団繁殖地）やねぐらとして利用している。東京湾の浅場は重要な採餌場所であり、多くの個体が採餌のために集まる。	 森ヶ崎の鼻 6月
スズガモ	冬鳥として内湾や河川、湖沼等に渡来するが、沿岸の海や大きい内湾、河口部に多く見られる。東京都では、餌となる魚類やアサリ、シオフキガイ等の二枚貝が豊富な葛西人工渚周辺とお台場海浜公園の海上に見られる。冬に確認される個体数は非常に多く、数千～数万羽の群れが見られることもある。東京都レッドリストでは留意種となっている。	 お台場海浜公園 1月
ホシハジロ	冬鳥として湖沼、池、河川、河口、内湾などに飛来する。雄の頭部と首は赤褐色、胸は黒く、体は灰色。雌は頭部から首が褐色、体は灰褐色。群れていることが多い。水中に潜って、水生植物の茎や根、イネ科植物の種子などを食べる。甲殻類などの動物も食べる。	 森ヶ崎の鼻 1月

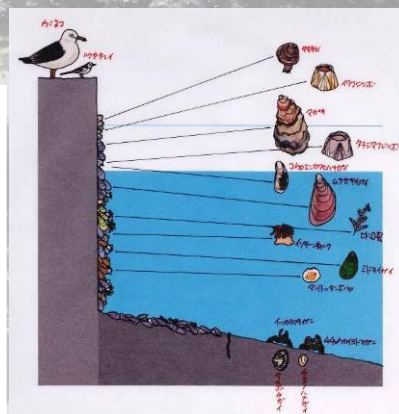
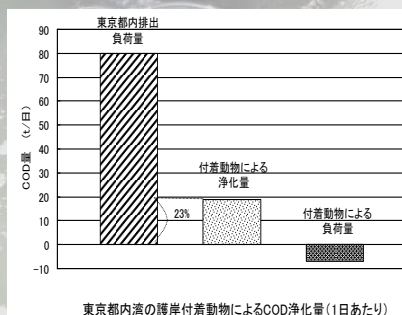
種 名	生 態 情 報	写 真
ユリカモメ	ごく普通に見られる、やや小型のカモメ。冬季に海岸の漁港や河口、干潟、河川等に渡来。主に昆虫や無脊椎動物、死肉等を餌とする。群れで生活し、大群になることもある。 冬鳥であるが、夏季に少数が越夏することもある。春季と秋季の渡りの時期には、数千羽が見られることがある。	都民の鳥に指定されている。  森ヶ崎の鼻 9月
アオサギ	日本に生息するサギ科では最大のサギ。水辺で魚を捕える。よく茂った樹林などに他のサギ類と共に集団繁殖地(コロニー)を形成する。鳴き声、フンの問題で近隣住民とトラブルになり、追いつめられることが多い。第六台場、鳥の島でカワウ、コサギ、ダイサギとコロニーを形成しており、東京都内では数少ない繁殖地である。	 お台場海浜公園 6月
コアジサシ	夏鳥として湖沼、河川、砂浜等に渡来し、体長10cm位以下の小魚を餌とする。繁殖期は5～7月で、海岸や川の中州、埋立地の砂地や砂礫地で集団繁殖する。東京都では、森ヶ崎水再生センターの屋上に人工営巣地が造成されている。東京都レッドリストでは、絶滅危惧IB類に登録されている重要種である。	 森ヶ崎の鼻 6月
カンムリカイツブリ	主に冬鳥として海岸や海岸付近の湖沼、大きな河川等に渡来し、魚類や甲殻類、昆虫類等を餌とする。 東京都では冬季に葛西人工渚周辺の海上に集中して見られる。かつては生息数が少なかったが、1993年度以降から急激に増加した。潜水して魚類や甲殻類、昆虫等を捕食する。 東京都レッドリストでは留意種である。	 冬羽では顔から胸が白く、首が長く体が大きい ため、海上に浮いていると白く目立つ。 お台場海浜公園 2月
ホウロクシギ	旅鳥として春季と秋季に海岸の砂浜や干潟、河口の砂泥地等に渡来し、泥の中に首をねじりながら下方に湾曲した長い嘴を深く差し込み、カニ類等を捕らえる。他にゴカイ類、貝類、昆虫類等を餌とする。個体数は少ない。東京都では葛西人工渚の干潟が、主な渡来地となっている。種の保存法では国際希少野生動植物種、環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類(VU)、東京都レッドリストでは絶滅危惧ⅠA類(CR)である。	 葛西人工渚 9月

付着動物調査（本文121ページ）

付着動物とは護岸についた生き物のことを指し、その生息範囲は長期間にわたる環境の影響が反映されます。調査は、岸壁から海底まで潜水して垂直に分布状況を調べます。中央防波堤外側（その2）東側、13号地船着場で5月に年1回、付着動物の調査を実施しました。付着動物は、ムサキイガイ等の外来種が多いことが特徴的で、バラスト水との関係で水環境・生態系の問題となっています。

付着動物の死骸は海底に堆積するため、貧酸素水塊が形成される一因とも考えられています。一方、付着生物は水質の浄化にも寄与しており、東京港内護岸総延長でのCOD浄化量が、東京湾に排出される汚濁負荷量の23%に相当するとする試算結果^(※2)もあります。

（※1）東京都環境科学研究所
木村ら 1998



調査地点の状況

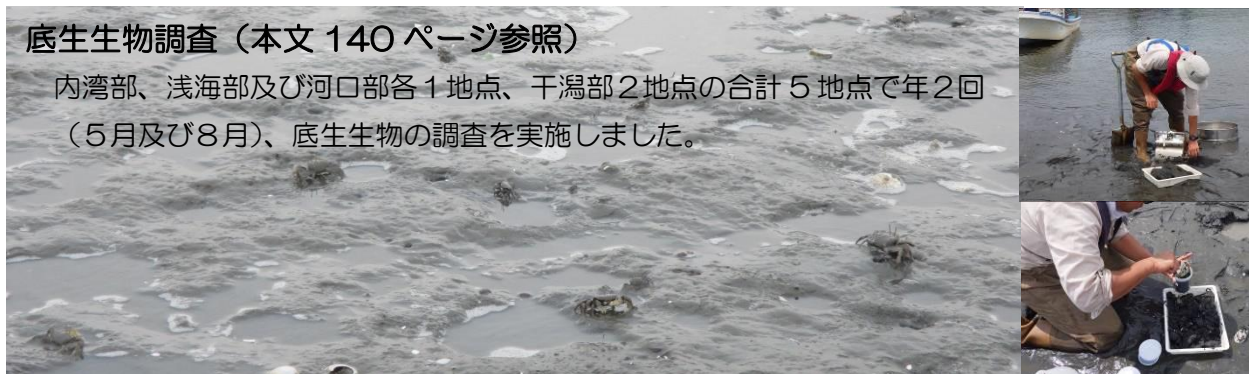
	中央防波堤外側(その2)東側	13号地船着場
概況写真		
備考	中央防波堤外側埋立地の外側岸壁を調査地点として設定	お台場海浜公園から中央防波堤埋立地へ通じる第二航路海底トンネル排気塔にある船着場を調査地点として設定

付着動物調査で確認された代表種等

種名	生態情報	確認状況
イワフジツボ	【代表種】潮間帯の岩の上部に群生する小型のフジツボ。殻口は広く、周殻は単独のときには円錐形であるが、密集すると円筒形を呈する。長時間の干出によく耐える。北海道南西部以南に分布し、内湾でもかなり奥まで分布する。周殻の直径は8mmほど	 両地点とも潮間帯の上部に優占した。
カタユレイボヤ	【代表種・外来種】体は半透明で、体長10cmほどになるホヤ類である。東京湾では普通に見られ、内湾域の岩礁や護岸等の基質に群生していることが多い。プランクトンを濾過して食べる。	 両地点とも潮下帯で優占した。

底生生物調査（本文 140 ページ参照）

内湾部、浅海部及び河口部各 1 地点、干潟部 2 地点の合計 5 地点で年 2 回（5 月及び 8 月）、底生生物の調査を実施しました。



内湾部（St.6）及び浅海部（三枚洲）

St.6		三枚洲	
マメウラシマ	シズクガイ	クーマ属	ウミグモ綱
ユビナガスジェビ	チヨノハナガイ	シロガネゴカイ科	サクラガイ
(現場で生体が確認できなかったため写真なし)		シオフキ	アサリ
		ホンビノスガイ	マテガイ
5月 30種・724 個体 下層 DO 2.3mg/L	8月 2種・2 個体 下層 DO <0.5mg/L	5月 15種・69 個体 下層 DO 11.8mg/L	9月 14種・109 個体 下層 DO 6.5mg/L

※三枚洲のみ、夏季の調査を 9 月に実施

河口部（St.31）及び干潟部（多摩川河口干潟）

St.31		多摩川河口干潟	
アサリ	アラムシロ	ヤマトシジミ	ソトリガイ
チロリ属	タカノケフサイソガニ	ヤマトオサガニ	ムロミスナウミナナフシ
アサリ	カガミガイ	ヤマトシジミ	チロリ属
ミズヒキゴカイ	ホトギスガイ	ヤマトオサガニ	紐型動物門
5月 24種・163 個体 表層 DO 8.2mg/L	8月 12種・174 個体 表層 DO 6.0mg/L	5月 16種・93 個体 表層 DO 5.9mg/L	8月 13種・70 個体 表層 DO 7.3mg/L

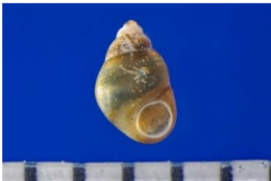
（全景及び泥の写真はいずれも 5 月のもの）

下層 DO と表層 DO

調査対象の底生生物が生息している付近の水深の DO を併せて載せています。干潟・浅場では、夏季でも生物が生息できるほどの溶存酸素量があることが分かります。

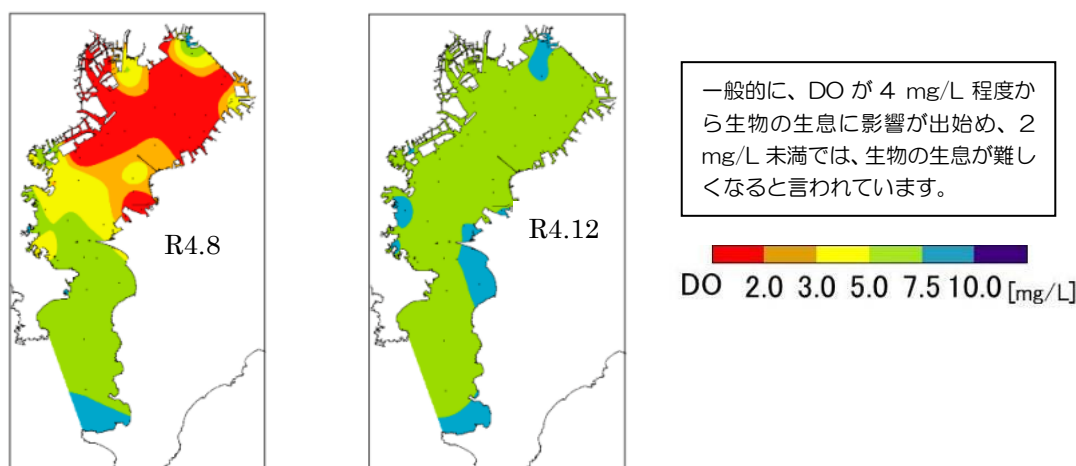
下層 DO（海底から 1m 上）：内湾部、浅海部
表層 DO：干潟部、河口部

主要な底生生物出現種

軟体動物門 腹足綱 ウミゴマツボ <i>Stenothyra edogawensis</i> 説明 殻長3mm程度になる。淡水の影響の強い内湾奥の泥干潟上の泥上に生息する。東北から九州まで分布する。(別名エドガワミズゴマツボ) 【出現状況】 森ヶ崎の鼻と多摩川河口干潟では春季と夏季に、St.31では夏季に確認された。 千葉県RL 一般保護動物 (D) 環境省RL 準絶滅危惧 (NT)		軟体動物門 二枚貝綱 ソトオリガイ <i>Laternula (Exolaternula) marilina</i> 説明 殻長50mm程度の二枚貝。殻は非常に薄く、前・後端は開口する。太く長い水管を出して、河口域近くの干潟の砂泥底にやや深く潜って生息する。 【出現状況】 多摩川河口干潟では春季に確認された。 千葉県RL 要保護生物 (C)	
軟体動物門 二枚貝綱 ガタヅキ (コハギガイ) <i>Arthritica reikoe</i> 説明 内湾奥砂泥干潟中・低潮帯の底泥に浅く埋もれて生息する。環境攪乱により東京湾奥部で爆発的に増殖したが、近年までは発見例がない。 【出現状況】 森ヶ崎の鼻では春季と夏季に、多摩川河口干潟では夏季に確認された。 環境省RL 情報不足 (DD)		軟体動物門 二枚貝綱 ミゾガイ <i>Sitiqua puchella</i> 説明 殻長30mm程度の二枚貝。殻は非常に薄く青紫褐色の半透明で、殻頂から腹縁にかけて強い内肋が1本ある。外洋に面した内湾の干潟の干潮線から外洋の砂底の潮下帯に生息する。 【出現状況】 三枚洲では春季に確認された。 千葉県RL 一般保護生物 (D)	
軟体動物門 二枚貝綱 アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i> 説明 殻長4cm程度になる。潮干狩り等で盛んに獲られている代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細くて、模様のコントラストが強いものが多い。 【出現状況】 St.31と森ヶ崎の鼻では春季と夏季に、多摩川河口干潟では春季に、三枚洲では夏季に確認された。		環形動物門 多毛綱 コオニスビオ <i>Pseudopolydora paucibranchiata</i> 説明 体長10～15mm、体幅0.5～0.8mmの小型のゴカイ。潮下帯泥底に棲管を作り、数cmほど突出させることが多い。黄白色斑列のある副感触手が特徴的。 【出現状況】 St.31では春季に確認された。	
軟体動物門 二枚貝綱 サクラガイ <i>Nitidotellina hokkaidoensis</i> 説明 殻長15mm程度になる。殻は桃色で、大型になると白桃色になる場合もある。殻の膨らみは非常に弱く、扁平。内湾の干潟線から30mの砂泥底に分布する。干潟周辺では保全されたアマモ場の泥底に多い。 【出現状況】 三枚洲では春季に確認された。 環境省RL 準絶滅危惧 (NT)		節足動物門 軟甲綱 ムロミスナウミナナフシ <i>Cyathura muromiensis</i> 説明 体長2cmほど。細長い円筒状の体をしており、白地に褐色の斑紋がある。干潟の表層部に巣穴を掘って生活する。 【出現状況】 多摩川河口干潟では春季と夏季で、森ヶ崎の鼻では夏季に確認された。	
軟体動物門 二枚貝綱 ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i> 説明 殻長4cm程度になる。河口干潟等淡水の影響の強い、砂底から泥底に生息する。 【出現状況】 多摩川河口干潟では春季と夏季、森ヶ崎の鼻では夏季に確認された。 東京都RDB 情報不足 (DD) 千葉県RL 重要保護生物 (B) 環境省RL 準絶滅危惧 (NT)		環形動物門 多毛綱 シノブハネエラスピオ <i>Paraprionospio patiens</i> 説明 ハネエラの名の通り頭部に羽状の鰓を持つ。貧酸素環境に耐性があり、有機汚濁指標種となっている。 【出現状況】 St.6と三枚洲では春季と夏季で確認された。	
軟体動物門 二枚貝綱 シズクガイ <i>Theora fragilis</i> 説明 東京湾では代表的な汚濁指標種。内湾潮下帯の軟泥底に生息する。貧酸素耐性があり、無酸素状態でも水温25℃であれば1日間生存できる。 【出現状況】 St.6とSt.31では春季に確認された。		節足動物門 軟甲綱 ヤマトオサガニ <i>Macrophthalmus (Macreotis) japonicus</i> 説明 甲幅4cm程度。柔らかい水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。 【出現状況】 多摩川河口干潟で春季と夏季に確認された。 東京都RDB 留意種 千葉県RL 一般保護生物 (D)	

生き物の脅威となる「貧酸素水塊」

東京湾、とりわけ東京都内湾では、毎年、春から夏にかけて、下層に溶存酸素量（DO）の低い「貧酸素水塊」が、広範囲・長期に形成されます。この水塊は、水生生物の生育・生息を阻害する原因の一つとなっており、東京湾の水環境の大きな課題となっています。貧酸素水塊形成の要因と考えられるのは、赤潮の発生や成層の形成による上下の水の循環が起こらないことです。赤潮については、「令和5年度 東京湾調査結果報告書 ～赤潮・貧酸素水塊調査～（東京都環境局）」にて詳述しています。



令和4年度における東京湾の下層 DO（溶存酸素量）の平面分布

左：貧酸素水塊が広がる 8 月、中央：回復過程にある 12 月

（東京湾岸自治体環境保全会議の東京湾水質調査報告書より）

貧酸素水塊の影響 ～成魚調査より～

9 月の調査時には、下層の溶存酸素量が低めであり、生物種類数が激減しました。一方、貧酸素水塊が形成される前の 5 月、解消からしばらく経った 2 月の調査では、多くの生物が確認されました。

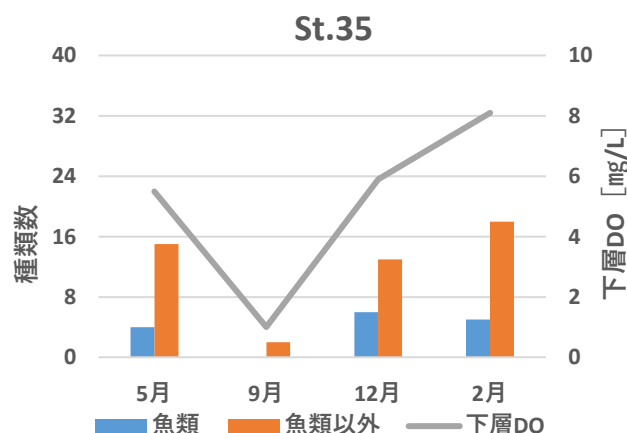


図 St.35 の採取生物種類数と下層 DO

5月 19種 1,085 個体



9月 2種 3個体



【参考】

東京湾再生推進会議

「東京湾再生のための行動計画（第三期）」（令和5年3月）

快適に水遊びができ、「江戸前」をはじめ多くの生物が生息する、
親しみやすく美しい豊かな「海」を多様な主体が協力しあうことで取り戻す
～流域 3,000 万人の心を豊かにする「東京湾」の創出～

「第9次水質総量削減の在り方について（答申）」一部抜粋（令和3年3月）

「藻場・干潟の保全・再生等を通じた水質浄化及び生物多様性・生物生産性の確保等の重要性に鑑み、地域の実情を踏まえた総合的な取組の確実に推進していくことが必要である。」

～赤潮（プランクトン）調査、水生生物調査の速報を発信しています～

東京都環境局HP

東京都 水環境

検索



(<http://www.kankyo.metro.tokyo.jp/water/index.html>)

HP では、水生生物調査、赤潮調査の速報や、過去の報告書等を掲載しています。

平成 31 年度 東京都内湾水生生物調査 5 月稚魚調査 速報

●実施状況

令和元年 5 月 17 日に稚魚調査を実施した。天気は晴れで、気温 21.0～24.1℃であった。調査地点は南寄りの風 1.9～4.2m であり、葛西人工渚は、他の 2 地点に比べ、風波がやや大きかった。調査当日は中潮で、干潮が 10 時 1 分、満潮は 16 時 25 分であった（気象庁のデータ）。

各地点とも、例年に比べてスズキ、マハゼは少なかったものの、ボラの稚魚は例年と同程度採取された。

水生生物調査実施中！

稚魚調査中は、写真ののぼりを掲げています。見かけた方は、お気軽にお声がけください。



X (旧 Twitter)

水環境関連のポストをしています。



東京都 環境・自然 
@tochokankyo

QR コードは
こちら↓



東京都 環境・自然 @tochokankyo · 2022年11月24日
【水生生物調査で初めてコウノトリを確認！】

10月の調査において、羽田空港近くの干潟で探餌、休息するコウノトリが確認されました。
コウノトリは世界で2500羽以下しかおらず、国の特別天然記念物に指定されています。
本個体は足環から、2018年に福井県で放鳥された個体とわかりました。

